# 随想　むかし、むかし

## ～ヒトの手によって直接なされることの尊さを思う～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

お盆の休み明けに車で福島へ向かっていた。夜のドライブでは、いろいろなことを考える。

たまたま、著者が小学生の頃に音楽の時間よく歌った《灯台守》（注1）を口ずさんでいた。

（一番）
凍れる月影　空に冴えて
真冬の荒波　寄する小島
思えよ灯台　守る人の
尊き優しき　愛の心

（二番）
激しき雨風　北の海に
山なす荒波　猛り狂う
その夜も灯台　守る人の
尊きまことよ
海を照らす

この歌詞が自然と頭に浮かんできたものである。

筆者が幼稚園に通っていた時、父親は《幼年クラブ》という雑誌を毎月買ってくれるようになった。そこには往年日本の少年すべてが胸を躍らせた《少年ケニヤ》の著者が、幼稚園生向けに書いた《海のサブー》というタイトルの連載冒険物語があった。幼い筆者にとっても毎月主人公・サブーがどうなるのか、待ち遠しい思いで、毎月の雑誌を待った（現在国会図書館に保管されているが、公開はされていないようだ。ちなみに、小学校四年生の時、学級文庫で読んだ《両棲人間》はいまだにネット書籍販売で入手できる）。

サブーの物語が終わる前に、著者は小学生になった。父親は突然毎月の雑誌を《少年倶楽部》に替えてしまった。楽しみにしていたサブーの物語が読めなくなって、父親へ何度も文句を言ったものである。しかし『もう、小学生になったのだから、幼年ではないのだよ!』などとなだめられて、いつの間にか新しい雑誌に慣れていった。その《少年倶楽部》に連載され始めたのが、灯台を舞台にした少女とその家族の物語である。タイトルもストーリーもよく覚えていないが、行き交う船の道標（みちしるべ）を灯すことに命を賭けている父親と、それを一所懸命支える主人公の少女の寂しくも厳しい生活に新たな感動を覚えながら、読んだ記憶がある（《灯台に灯る光に呼び寄せられた小鳥が光源のガラス壁に頭を打ち付けて死亡する》という物語に少女が小鳥の亡骸を胸に抱くイラストが描かれ、当時幼かった著者は《その小鳥たちを救いたい》と心を痛めていた。当時からすでに生き物に対する興味は人以上であったのかもしれない）。

中学校に進学し、二年生の時に灯台守の一生を舞台とした《喜びも悲しみも幾年月》（注2）という映画が上映された。この物語の主人公はわが国の激動の時代をひたすら灯台に光を灯し、船の安全を守る一生を描いていた。

かつて灯台守によって守られた光の道標は、二〇〇六年十二月五日に最後の女島灯台が無人化され、現在の灯台には人はいない。また、ＧＰＳの発達により灯台の存続も危ぶまれ、歴史のメモリアルとしての存在を残すか否かと問われる時代である。

すべてがコンピュータ化され、ＡＩ（人工知能）によりコントロールされる傾向が強い現代では『人が並外れた苦労をする必要があるのか?!』という問いかけに答えにくくなってきている。

故人となってしまった《高倉健》による鉄道員（ぽっぽや・注3）も、前述の灯台守と同様に人生を賭けて駅（鉄道）を守る人間像を取り上げている。

時代は変わり、週休二日制が当たり前と受け止められ、さらにはコロナ騒動により、リモートワークが叫ばれるようになっている。

羽鳥慎一モーニングショー（テレビ朝日）で、東京から北海道へ移住したリモートワーカーが取り上げられていた。取り上げられた女性は、経理処理の補助をするのが業務で、計理士や税理士をサポートして決算資料を作成し決算書を作るのが業務であるという。

これまでは、子供を保育園に送り迎えしかつ長距離の通勤を強いられることで、三時間以上を無駄にするため、非正規で働かざるを得なかった。しかし、リモートワークとなった今では、北海道の地方都市に住み（北上?）、個人で借りた共同オフィスへ一〇分かけて通勤することで済む。また、地方であるため、東京で月一七万円かけていた家賃（２ＬＤＫとのこと）が七万円（３ＬＤＫ）に下がった。都合三時間の労働時間が追加できるため、正規雇用で働くことができ、働きがいが生まれた、と報道していた。

『なるほど、いろいろな世界が広がるものだ』と関心はするものの、地味で目立たない働きで世の中を支えている人々（最近は格好をつけてエッセンシャル・ワーカーと呼ぶらしい）は、具体的なモノを目の前にして悪戦苦闘している。その働きがあってこそ、生活資材が満足に供給されることが何かしら忘れ去られているように感じられる。

幼いころに唱歌で歌った《灯台守》から、まぶたの裏に浮かぶ一途な人生、そこに見知らぬ人の航海の安全をひたすら祈っている心根が伝わってくる。《喜びも…》も《鉄道員》も同じ。

東京で私鉄を使って移動する時、若い駅員たちの働きや運転士・車掌の方々が地味であるが少しのズレもなく運用しようとする（そしてそれを実行している）姿勢に、改めて感動し、感謝することが多い。

そうしたものには、見知らぬヒトへの《こころ》が宿っている。便利になり、より自分のことしか考えなくなっている現代を思い、《ヒトの手による》ことの大事さを改めて思った。

注１：原曲はイギリスともアメリカともいわれるようであるが、唱歌・灯台守としてこの歌詞が付けられたのは昭和二十二年（一九四七年）に文部省発行の小学校五年生の音楽教科書に掲載された《勝承夫：かつ・よしお》の作詞による。

注２：一九五七年に松竹映画で制作。監督・木下惠介、主演・高峰秀子、佐田啓二。昭和七（一九三二）年第一次上海事変時代）から昭和十二（一九三七）年日中戦争時代、昭和十六（一九四一）年太平洋戦争勃発時、昭和二十年（一九四五）年敗戦時、昭和二十五～三十（一九五四～五五）年の長きにわたって、人生のすべてをかけて灯台を守った夫婦の物語を映画としたもの。長男が不良との喧嘩で殺された時も、娘の結婚の日も、ただ灯台に光を灯すことにすべてを賭ける人生は圧倒的な迫力で子供心を揺すぶった

注３：浅田次郎原作の小説（一九九七年・集英社）を映画化した（一九九九年・東映・降籏康男監督）もので、北海道の廃線が予定されている駅を守る駅長の人生を舞台とした物語。蒸気機関車の機関士からローカル駅長に至る一生で、二歳になる一人娘の事故死の葬式にも立ち会わず、ただ一筋に駅を守る人生を描いている（日本アカデミー賞受賞等）。